

〈資料紹介〉

椿椿山筆 〔深み春山像〕について

竹原明理

はじめに

当館では、令和三年度（二〇二一年度）から歴史・美術工芸分野に収蔵される絵画資料の悉皆調査を実施している。絵画を専門とする研究者や他館学芸員の協力のもと、これまでに一二〇点ほどの作品データが集まった。作品名、作者、時代、法量、品質・形状、保存状態といった情報や作品の画像を改めて揃え、再整理し、コレクションの全体像を把握すべく調査を継続しているところである。

実際、当館のコレクションはこれまで公開される機会があまりなく、絵画資料に特化した目録も刊行されていないため、熊本県外はおろか、熊本県内においてもほとんどその存在が知られていない。調査の度に、「こんな作品がここにあったの?!」と調査メンバーから驚かれる場面もある。

本稿では、これまでの調査のなかで真筆と初めて確認された椿椿山（一八〇一〜五四）による熊本藩侍医・深み春山（一七七六〜一八六八）の肖像画について報告する。

1. 作品の概要

〔深み春山像〕は、平成二四年（二〇一二）に春山の子孫・深み

三郎氏から当館にご寄贈いただいたものである<sup>1)</sup>。寄贈当時から椿山の作品と伝えられていたが、賛が記された時期が椿山の没年からかなり経っていることなどから、真筆との判断は保留されたままとなっていた。今回の調査<sup>2)</sup>で絵画の専門家を交えて調査を実施し、本作が椿山によるものと確認するに至った。

まずは作品全体を見てみよう。本作画面中央から下部にかけて春山の姿が描かれ、画面上部の余白に春山自身による賛が記される。本紙は縦一四四・〇センチ、横五五・二センチで、絹本着色、掛幅装である。

次に描かれた春山の姿を見てみよう。全体的に淡い色調で、やや右方向に顔を向けて座る像主の表情は大変穏やかである。額、目元、口元の皺や喉元の皮膚の垂れ具合が像主の年齢を感じさせる。長めの眉毛、ぼつてりと丸みを帯びた鼻筋、耳から生える毛、左のこめかみ付近のほくろなどが像主の特徴を表す。頭には薄絹の頭巾を被り、着物の上に縁起の良い松喰鶴文が緑糸であしらわれた十徳を羽織る。左腰には小刀を挿し、左手に如意、右手に如意の紐を持つ。

款記はないが、画面右下、像主の左の袴の上に「椿彌寫照之印」（二・三センチ×一・五センチ。白文長方印）という椿山の印が確認できる。しかし、この印の周囲がやや薄く変色し、周囲の本紙も若干よれた状態に見えることもこれまで判断が保留となっていた一因である。

さて、画面上部には春山自身による賛が次のようにしたためられている。署名から、春山が数えて八八歳の年、文久二年（一八六二

年)に記されたものとわかる。

天寵異常 授斯骨相  
精氣充體 既壽康強  
志存濟生 道宗扁張  
生不盡心 何對彼蒼

文久壬戌三月

八十有八春山自題

(意識)<sup>3</sup>

天の恵みは特別で、このような体(骨相)を授けた。

精気は体中に満ちて、全く健康である。

私の志は人を救うことであり、救いを広げることが本意とする。

生涯は私の意を尽くすには短く、この老いとどう対峙しようか。

迷いのない、丁寧な筆致で記された賛からは、八八歳を迎えてなお豊饒かくじくとしており、医師としての志に満ちた春山の様子がうかがえる。その一方で、人生の短さと肉体の衰えを痛感している様子も伝わる。賛に付された印を見てみると、関防印は「活人洞」、落款は「深水玄門」「士龍氏」と確認できる<sup>4</sup>。「玄門」「士龍」は春山の字である。

## 2. 深水春山について

像主である深水春山については、主に武藤巖男(一八四六～一九二三)による『肥後先哲偉蹟 後篇』(肥後先哲偉蹟後篇刊行会、一九二八年)に収録された文章からその人物像が伺える。以下、同書を参照しつつ、春山の人物像を追ってみよう。

まず、若き頃に春山のもとで学んだ儒学者・広瀬範治<sup>5</sup>が明治九年(一八七六)三月に草した「春山深水先生墓誌銘」には、概ね以下のようなが記されている。

春山は、名を玄、字を士龍、玄門と称した。葦北津南(現在の芦北郡津奈木町)に住み、四代前の玄庵より医業を始めたという。春山は、幼い頃から祖父の宗恕、父の宗安より医学についてよく学んだ。一七歳の時、その様子を聞きつけた高山正之<sup>7</sup>の紹介で熊本藩医・村井琴山<sup>8</sup>に師事し、熱心に学んだ。やがて医者として独立した春山は、病に苦しむ人々に薬を与え、看護体制を整えるなどした。その名は頼山陽や田能村竹田のように広く知られ、多くの人が春山のもとを訪れた。天保年間には侍医に抜擢され、嘉永年間には二〇〇石を与えられた。在職中は、藩主の参勤などに追従して江戸へ何度も上り、その道中は治療を乞う人々によって宿場ごとに市ができるほどであったという。安政二年(一八五五)、高齢のため約二〇年従事した侍医を辞した。没年から考えると八〇歳頃のことであろう。

春山の性格は温厚で、義理堅く、忠義を尽くす人物であった。親の死後は墓の側に五年間廬を構え、先代の藩主の月命日には毎月廟に参詣し、廟の方向に足を向けて眠ることはなかったという。先

代の藩主に倣い大変質素な生活を送ったといい、毎日朝早くから部屋を掃除し、花を飾り、よく働いて汗を流した。九〇歳になっても顔色は艶やかで、見ることに、聴くことに問題はなく、壮年のようであったという。春山の長寿を讃えて藩主が健康の秘訣を手紙でたずねると、春山は「節飲食省情欲」の六字を送った<sup>10</sup>。

戊辰（一八六八年）の冬に病床にいたが、生徒に本を読み聞かせてもらっている間は病のことを忘れて楽しんだという。同年二月二三日、九三歳で死去し、飽託郡島崎村の霊樹庵に葬られた。春山は予め墓所を選定し、桜の木を植えていた。春山の弟子は七〇〇人前後に及び、五男六女に恵まれた。長男の宗信が跡を継ぎ、五男が春山の家に残ったという。さらに、春山の志を継いで、孫の東吾、ひ孫の長胤もまた医者となった。

以上が、広瀬範治による墓碑銘をもとにたどった春山の生涯である。熊本大学附属図書館と熊本大学永青文庫研究センターが公開する「一九世紀熊本藩住民評価・褒賞記録「町在」」<sup>11</sup>解析目録検索システム<sup>12</sup>を見てみると、寛政一二年（一八〇〇）二月三日付で春山の父・宗安が病死したため、春山がその跡を継ぐ旨の覚書が郡代から郡方奉行宛に提出されている<sup>12</sup>ほか、文化九年（一八一二）三月に春山とその弟・宗古が兄弟協力し合って「療治方出精」したことに対して、金子二〇〇疋が与えられている<sup>13</sup>。そのほか、春山の弟子であった医師たちについても度々その動向が記されている<sup>14</sup>。

### 3. 本作に関連するいくつかの情報

広瀬範治による「春山深水先生墓誌銘」とあわせて『肥後先哲偉蹟 後篇』に収録される春山の孫・成章が記した「王父春山君行状」にも先のような春山の功績がさらに詳しく記されている<sup>15</sup>。特にエピソードの一つとして、「見者偉之、曾療椿椿山之病、椿山為寫肖像謝之、君自題曰、天寵異常、賜斯骨相、精氣充體、既壽且康、志存濟生、道宗扁張、生不盡心、何對彼蒼」と紹介されている<sup>16</sup>。つまり、かつて春山が椿山の病を治療した際に、お礼として椿山が春山の肖像画を描き、春山自身がこれに賛をつけたということが伝聞として記されている。まさにこの記述が本作をさすものと推察され、本作は椿山による春山の寿像ということになる。春山が江戸滞在中の出来事と考えられよう。

同じ時期に描かれたであろう《椿椿山自画像》（江戸時代後期、上野記念館蔵）に表された椿山の姿は頬がこけ、大変な痩身である。肺を患い、死を予感していた時期の姿ではないかとも考えられている<sup>17</sup>。春山はこの頃の椿山と接点があったのだろうか。椿山の病状はどのようなもので、春山がどのような治療を施したのか、そしてどのようなやり取りによって本作が生まれたのか、その背景は今後の課題である。

本作寄贈時の平成二四年（二〇一二）に旧蔵者・深水三郎氏から当館が聞き取りを行った際のメモには、三郎氏がその父から聞いた話として、かつて深水家に椿山からの借金の申入書が残っていたが、明治一〇年（一八七七）の西南戦争で失われたという内容が記載されている<sup>18</sup>。天保年間に春山が侍医に任命されてから、椿山が

亡くなる嘉永七年（一八五四）までの間、春山の江戸滞在の折に普段から椿山と何らかの交流があった可能性があるが、現時点でその詳細は得られていない。

春山の孫・成章の文章には、本作の賛に使用された関防印「活人洞」についても解説がある。安政二年（一八五五）に侍医を辞した春山は、龍谷崖という所に「皆山楼」という小さな書屋を築いた。薩摩藩士・鮫島白鶴（黄裳。一七七四～一八五九）は、春山とやり取りをする中で機知に富んだ応答に驚嘆し、「活人洞」の三字を送り、以後、春山の書屋もこの名になったという<sup>19</sup>。

文久三年（一八六三）、春山の米寿を祝う祝賀会が開かれた。本作の賛はこの前年、米寿を迎えるにあたってしたためられたものである。藩内外からも名士が集い、各々詩文や和歌、書画を持ち寄って春山を祝った。これらは「米寿帖」としてまとめられた<sup>20</sup>。さらに、九〇歳の折にも祝いの席が設けられ、藩から御紋付の縮緬綿入羽織が与えられるなど公にその長寿が讃えられたという。

#### 4. 椿山の技法と本作との比較

本作に用いられている「椿弼寫照之印」の印は、弘化二年（一八四五）以降の肖像画に使用されているという<sup>21</sup>。つまり、本作は弘化二年以降、椿山が没する嘉永七年（一八五四）までの九年間に描かれたもので、春山が七〇歳から七九歳頃の姿と考えられる。完成後、何らかの理由で賛が入られなまま、春山が米寿を迎える頃に自ら書き加えたということになる。

改めて本作を見てみると、全体的に淡い色調で、面貌の筆致は非常に繊細である一方、衣服は比較的大らかな線描で表されている。椿山の肖像画・人物画について考察した増山楨之は、椿山の人物画技法の特質について、「揺れる線描と薄い色使いにある」とし、「この線描は、顔貌表現の陰影と衣服の線描の格差を解消するために案出されたものである」と指摘している<sup>22</sup>。本作にも同様の技法と色使いが全体的に認められる。「椿弼寫照之印」の押印がある同時代の椿山による肖像画、たとえば《高久靄厓像》（重要文化財、弘化二年・一八四五、個人蔵）や《浅野梅堂母像》（弘化四年・一八四七、板橋区立美術館蔵）などに見られる表現や技法が、本作にも共通して用いられていると見ることができよう。

今回の調査後、インターネットのオークションサイトに「東肥深水春山先生像」が出品されているのを確認した<sup>23</sup>。商品説明によると、本体寸法（表装を含むカ）は横約六五センチ×縦一六九センチと記載されている。外題に「東肥深水春山先生像」の墨書がある。掲載された写真を見る限り、絹本着色で作品全体の構図は本作に似る。しかし、画面全体が汚れ、表装上部の左右には鼠損が見られるほか、本紙の横折れが多数確認でき、軸端が取れるなど保存状態はあまり良くないようである。賛は本作と同じ内容を述べる意図が感じられるが、文字の並びが異なる上、筆跡も大きく異なる。落款には「深水玄門」「土龍氏」の印が確認でき、本作の印と一致する。一方、関防印は「□求古□／轉□□□」<sup>24</sup>の八字を刻し、「活人洞」の押印がある本作とは全く異なるものである。肖像画のほうは、本

作と一見酷似するが、特に顔貌の筆致や着物の文様、色使いは大きく異なっている。また、椿山の「椿弼寫照之印」の印は確認できない。

おそらく、オークションサイトに出品されたこの春山像は、春山の弟子や縁戚関係者の求めに応じて、後年になって本作を写したものと考えられる。本作を元に、複数の写しが作られた可能性もあるだろう。

おわりに

椿山とその作品については、これまで多くの研究が蓄積されており、美術史的な価値付けをここで論じるような紙幅も力量も筆者は持ち合わせていない。とはいえ、今まで対外的には「未確認」の状態であった《深水春山像》について、専門家を交えた調査によって初めて椿山による作品と確認するに至ったことは大きな成果である。未だ春山と椿山の交流や肖像画制作の背景など、課題は多く残る。しかしながら、本稿を通して初めて本作を紹介することによって、まずはその存在を広く周知し、さらに今後の調査・研究に資する機会となれば幸いである。

〈謝辞〉《深水春山像》を当館にご寄贈いただいた故・深水三郎氏に心より感謝申し上げます。また、本稿執筆にあたり、福原透氏、高濱州賀子氏、金子岳史氏、宮原江梨氏、松田咲也子氏に多大なご協力をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

〈参考文献〉

田原市博物館 『渡辺崋山・椿椿山が描く人物画』 二〇〇五年  
武藤巖男 『肥後先哲偉蹟 後篇』 肥後先哲偉蹟後篇刊行会、  
一九二八年  
増山禎之 「いわゆる『椿山的』なもの」(田原市博物館 『渡辺  
崋山・椿椿山が描く人物画』二〇〇五年、一二六―一三三頁所収)

(たけはら あかり)

〈註〉

- 1 それ以前は長らく寄託となっていたが、所有者からの申し出により寄贈に切り替えられた。なお、当館収蔵品データベースの資料IDは6117、登録番号は22-04.6032-600。
- 2 第一回絵画調査(令和三年(二〇二二)八月五日実施)。
- 3 意識は、木山貴満(当館歴史担当学芸員)が行った。
- 4 各印の法量は次のとおり。関防印(白文長方印)は二・七センチ×一・六センチ。落款印「深水玄門」(朱文方印)は二・九センチ×二・九センチ、落款印「土龍氏」(白文方印)は三・〇センチ×三・〇センチ。
- 5 広瀬青邨(一八一九〜八四)のこと。幕末〜明治初期の儒学者。豊前国下毛郡の矢野家に生まれる。一六歳で広瀬淡窓の咸宜園に入り、後に深水春山に師事して医学を学んだ。天保一五年(一八四四)に淡窓の養子となり、咸宜園を継いだ。淡窓没後、府内藩の藩校・遊焉館の教頭となった。維新後は、京都の学習院漢学所などに仕立した後、私塾「東宜園」を設立するなどした。
- 6 武藤巖男『肥後先哲偉蹟 後篇』 肥後先哲偉蹟後篇刊行会、一九二八年、五四〜五五頁。
- 7 高山彦九郎(一七四七〜九三)のこと。江戸時代後期の勤王家。上野国新田郡の生まれ。各地を遊歴し、豊後の広瀬淡窓や肥後の蒲池正定など多くの学者や藩士と交友した。蒲生君平、林子平とともに「寛政の三奇人」とされる。
- 8 一七三三〜一八一五。江戸時代中後期の肥後の医師。再春館の教授を務めた父・見朴の死後、京都の吉益東洞に学んだ。晩年は熊本藩医を務めた。『医道二千年眼目編』などの著作がある。
- 9 熊本藩九代藩主・細川斉樹(一七九七〜一八二六)あるいは春山が仕えた一〇代藩主・細川斉護(一八〇四〜一八六〇)のどちらを指すかは不明。斉樹・斉護ともに藩の財政立て直しに取り組み、儉約的な生活を送った。
- 10 孫の成章が記した「王父春山君行状」によると、春山がしたためたこの六字は江戸時代初期の武将・文人の石川丈山(一五八三〜一六七二)の語から引いたものと記される(註6掲載書、五八頁)。
- 11 「町在」は永青文庫蔵。同システムへは二〇二二年四月一六日閲覧。
- 12 目録番号9.19.2-1-5、件名表題「芦北郡郡医師並深水宗安病死、忰深水玄門

跡目相続」。

- 13 目録番号9.20-1-21、件名表題「芦北郡郡医師並深水玄門・弟深水宗古、療治方出精等にて賞美」。なお、文化一二年(一八一五)六月二六日にも疫病流行に対して「療治方出精」として二〇〇疋が与えられている(目録番号9.20.4-1-86、件名表題「津奈木手永中村深水玄門、療治方出精にて金子90疋下し置き」)。
- 14 目録番号9.22.8-156、件名表題「湯浦手永郡医師並瀧井宗英病死、忰瀧井宗俊跡目相続」(天保七年(一八三六)五月二〇日付)ほか。
- 15 註6掲載書、五五〜六〇頁所収。
- 16 註6掲載書、五九頁。
- 17 田原市博物館『渡辺華山・椿椿山が描く人物画』二〇〇五年、一五二頁。
- 18 平成二四年(二〇二二)六月六日、熊本博物館による深水三郎氏への聞き取りメモより。
- 19 原文は、「薩之鮫黄裳名於書、寄詩曰、蒼顔白髮君休笑、腕力未衰數驚人、君答之曰、蒼顔白髮君休笑、業術未衰數驚人、黄裳嘆曰、驚人平々之事、活人仁惠之大事、非我所及、遂書活人洞三字以贈、遂名其室曰活人洞」(註6掲載書、五八頁)。
- 20 「米寿帖」の所在は不明である。
- 21 増山禎之「いわゆる『椿山的』なもの」(田原市博物館編『渡辺華山・椿椿山が描く人物画』二〇〇五年、一三三頁)。なお、「弼」は椿山の名である。増山は同論文の中で、「肖像画制作の『写照』という手続きは当たり前のように思えるが、あえてこのように主張することは椿山の肖像画のあり方を考えるうえで重要であるし、幕末の肖像画制作を考える上でも十分に議論する必要がある」と述べている(一三三頁)。
- 22 註21掲載書、一三二頁。
- 23 二〇二二年七月九日閲覧。オークションは、二〇二二年五月一九日に開始され、同二二日には終了している。開始価格は三、〇〇〇円。なお、同ページは現在削除されている。
- 24 改行は「/」、解説できない文字は「□」で表記した。

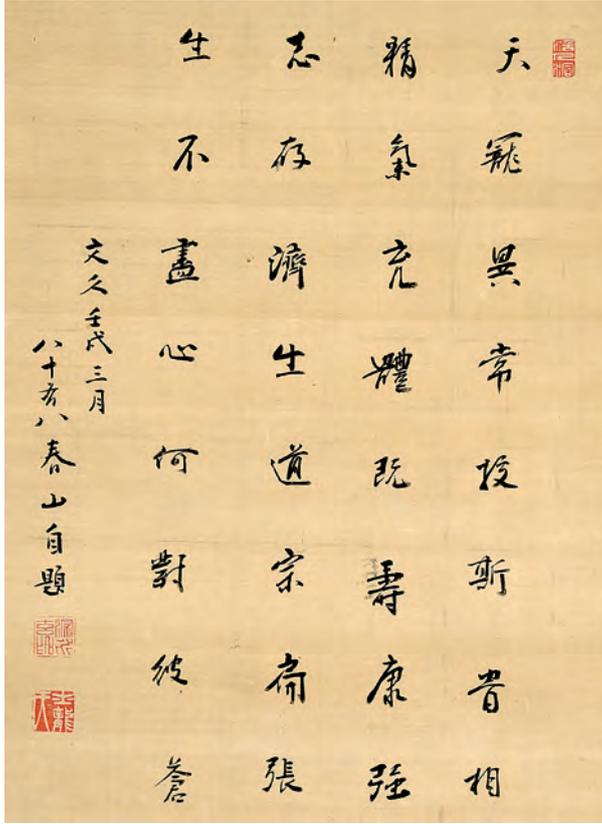
(本紙全体)

天寵異常授斯耆相  
精氣充體既壽康強  
志存濟生道宗希張  
生不盡心何對彼蒼

文久壬戌三月  
八十八春山自題



【春山自筆贊文】



【關防印】「活人洞」

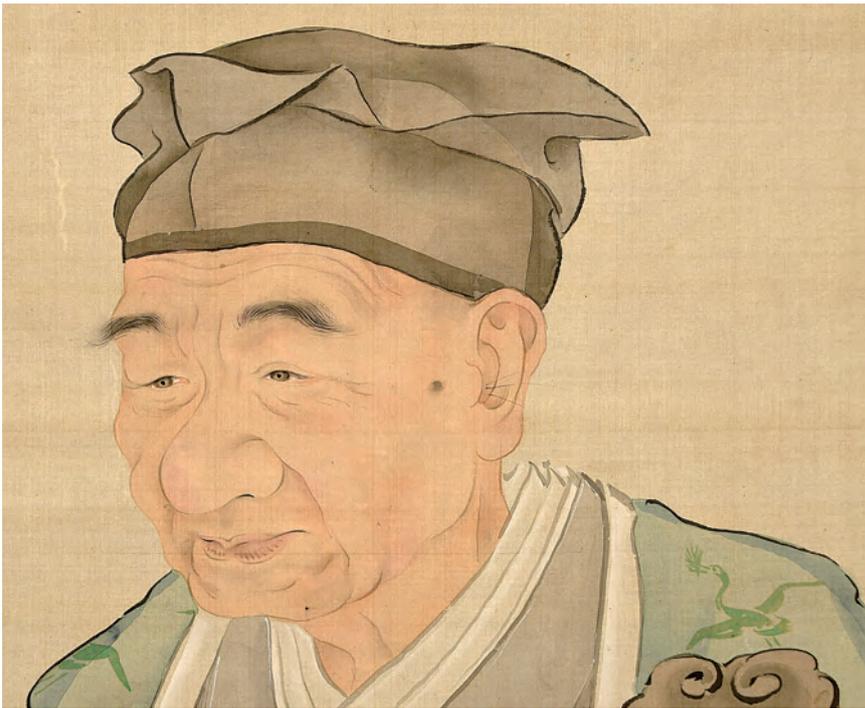
(各部拡大)



【落款印】  
(上)「深水玄門」

(下)「土龍氏」

【春山肖像 (顔貌部分)】



【落款印】「椿弼寫照之印」